





講談社

著者・瀬戸内寂聴 一九八六年十月一〇日第一刷発行 一九八七年十一月四日第四刷発行

◎著者・瀬戸内寂聴 ©宗教法人曼陀羅出版庵 1986. Printed in Japan

○発行者・加藤勝久

○発行所・株式会社講談社 東京都文京区音羽二一二一 郵便番号二二二 電話東京〇三一九四五一一二二(大代表)

○造本・杉浦康平・赤崎正一 ○印字・森山写真タイブ・プロダクティオ

○印刷所・凸版印刷株式会社 ○製本所・藤沢製本株式会社 ○定価・1000円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第一部へお願いいたします。

○著者住所・京都府右京区嵯峨鳥居木仙飼田町七一 ISBN4-06-202874-5(1)(文一)



かわら版

目次





命なりけり	8
晩年のががやき	
愛にはしまる	
ある晩年	20
ついのすみか	16
灰のぬくみ	23
末期の目	30
この年になつて	27
思えばこそ	36
旧友	33
死後の始末	40
死後の始末	43
死の覚悟	47
老いもたのし	50
赤いコンゴト	54
ある京女の最期	60
渡水看花(上)	57



* * * * *

渡水看花	(下)	63
横川の行		66
微笑仏		70
嵯峨野僧伽落慶		73
摩訶不思議		76
遊戯三昧		80
一滴文庫		83
たのしい夫婦		86
共に泣く		90
遂業証書		93
長く歩いた裁判の道		96
良薬口に甘		100
不幸のがたら		103
老女の孤独		106
最後の言葉		109
利賀フエヌティ、ル		113





116	文人之四合
119	中古音
122	生今之不
126	詩樂之非論
129	詩子王
132	到漢樂
136	叔乙之
139	金木屬
143	枚舉之說
146	甲山事件
149	月丁美入
153	參雜之說
156	我者之說
159	法體
163	文人之四合



秋すぎテ	166
晩年	170
柚子実る	173
雪大文字	176
日記にへそ	180
七種のあと	183
最後の幸せ	186
人のいのち	190
神の証	193
冬へんろ	196
針供養	200
畑打ち	203
真珠のネックレス	206
アイラブオール	208
再婚の手本	212





、
のち華やぐ
瀬戸内寂聴



命なりけり

年々にわが悲しみは深くしていよよ華やぐいのちなりけり

●岡本かの子がこの歌を、代表作の小説の一つ「老妓抄」の結びに据えたのは、かの子四十九歳の時であつた。かの子は小説家になる前に、歌人として知られていて、この歌も自選歌集に収めているくらいだから、快心の作だつたのだろう。その翌年、五十歳で死んだかの子にとつては辞世の歌ともいえよう。

「老妓抄」は、小そのという老妓が、出入りの若い電気屋の技師の、性ぬきの無償のパトロンになり、発明をしたいという男の夢をかなえてやろうとするが、男は老妓の老いを知らぬみずみずしい好奇心と生命力に圧倒されて、かえつて無氣力になっていくという筋である。

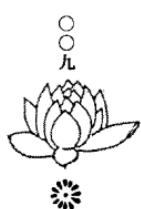


◎男を飼うというモチーフは、晩年のかの子の作品にしばしば見られたものだが、老妓ほど放胆に男を飼った小説は他に見ない。行き届きすぎた老妓の庇護の許に、次第に生きるパッショントラウトをしていく男に向かって、人に惚れるにしても心の底から惚れ合うべきで、お互いが切れつぱしの惚れ合いで、ただ何かの拍子で出来合うのはつまらないといい、

「仕事であれ、男女の間柄であれ、混り気のない没頭した一途な姿を見たいと思う。私はそういうものを身近に見て、素直に死にたいと思う」と、述懐する。

◎小説には老妓の年齢は書いてないが、およそ六十代半ばだと想像される書き方がされている。未知なものにあこがれる好奇心を失わず、あきらめを知ろうとしない老妓のいのちの華やぎは、またかの子自身のものであった。

◎五十歳にして童女のように見えたというかの子は、三十四、五歳から仏教に触れ、四十歳ころには仏教研究家としても、女性の第一人者にな



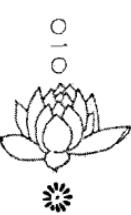
つていた。かの子の仏教観は、抹香臭いものではなく、生きている限り、いのちを極限に押し開いて生きまとどいうもので、むしろ生命の讃歌であつた。

●かの子は不意に訪れた死の直前まで、恋をしていた。内助の夫として稀有に彼女に尽くした岡本一平があり、彼女のために人生の軌跡を狂わせ、彼女の死ぬまでそばにいて、一平と共に彼女を支えた新田亀三という恋人がいた上の話である。その恋がプラトニックであろうとなからうと、^{せんき}詮索する要もない。

「わが悲しみ」と歌うかの子の「悲しみ」は、センチメンタルなものではなく、もつと人間の内奥を貫く、いのちの嘆きといったものであろう。生まれた瞬間から限られた生と死を約束され、ものの命を取り、それを自分の生きる糧にして、他人の犠牲の上に、自分の幸福をまぎらわかねばならぬ宿命を負つた人間の、逃れ難い業を自覚した深い悲しみであつた。

●かの子はこの歌を作る時、西行法師の、

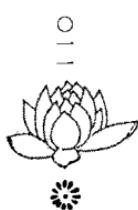
年たけて又こゆべと思ひきや命なりけり小夜の中山



という絶唱を想い浮かべていはないはずはない。

○西行がこの歌を詠んだのは、七十歳で、東大寺の砂金勧進という名目の、奥州へのはるかな旅の途上であった。七十の老年の旅路を、「いくにかねぶりねぶりてたぶれ、ふきむ」という決死の覚悟で歩いていた。西行もまた沙門の身でありながら、最後まで歌を作る煩惱を断ちきれないまま、あきらめを知らない情熱の持ち主であった。七十三年で花の下に望み通りの大往生をとげた西行と、夫と恋人に看とられ五十歳で逝つたかの子と、その生の軽重は問わない。

○ふたつの辞世の絶唱の中から響きわたるものは、悲しくも美しいかけがえのない人間の、命の貴さであり讃歌のように思われる。



● 晩年のかがやき

● 宇野千代さんは、今年十一月、満八十八歳のお誕生日を迎える。

米寿のお祝いには、盛大なパーティーをしようと、二、三年前から樂しみにして、いられ、

「その日は振り袖で三度お色直しをするのよ。あなたも出席して、三度法衣のお色直しをなさいね」

と、私におっしゃった。その顔色の何と晴れ晴れと明るかつたこと。

● その宇野さんが、

「米寿を人生の或る区切りだと考えると、これから後は、私の晩年と言うことになる」

と、正月の新聞に書いていた。私は声をだしてひとり笑つてしま



つた。初笑いである。

●常々、宇野さんは自分の年齢を気にしないといつていられる。米寿を迎えるまでに、還暦も、古希もすでに迎えられているはずである。宇野さんはそれらの人生の関所のようなものを、すっと風のように、何の抵抗もなく通りぬけてこられたのだろう。

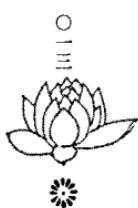
●還暦になるのを待ちかねて、仕事をやめ、まるで人生が終わつたように、自分からすつかり老けこんでしまう人もあるれば、宇野さんのように米寿になつてはじめて、ようやく晩年意識にめぐめる人もある。

「ただ、無意識に押し流されて、年をとるのではなく、一種の、意識を持つた、年月の過ごし方を考えて行きたいものだ」

と、宇野さんは米寿の年頭に考えると、即実行に移され、原稿用紙に向かい、「晩年」という題の小説に取り組まれるのである。何という意欲的で若々しい晩年であろうか。

●宇野さんはお逢^あいする度

「私たちは小説を書くという仕事を持つていてほんとによかつたわね」



と、口癖のようにおつしやる。死ぬ日まで小説を書きつづけられたらどんなにいいだろうという願望を、宇野さんは、ぼんやり願っているのではなく、そのために、一日に一万歩歩き、ビルの三階のお住まいには、階段を上り下りされ、読書にもマージャンにも意欲的に取りくまれ、若い人たちにも門戸を広く開き、好奇心は年と共にますますきこかんで、おしゃれには細やかに心を配つていられる。

● 米寿を迎えても、初めての経験は面白いといわれ、あらゆることに積極的にのぞまる。おそらく宇野さんは、卒寿までも悠々と生き、いつそう華やかな晩年を照り輝かされることだろう。

● 九十三歳で大往生をとげられた荒畑寒村氏は、九十歳で念願のスイスのアルプスに登るという憧れを果たされた。

● 荒畑先生も最後までお気持ちがお若く、おしゃれで、私が文中に寒村翁と書くのを厭がられて、

「翁なんて書かれると、どこの爺いかと思って、自分のような気がしない」

